Title	著者リプライ
Sub Title	
Author	笠井, 賢紀(Kasai, Yoshinori)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2020
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.25 (2020. 11) ,p.125- 126
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20201120-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

笠井 賢紀

ご多忙の折、拙著の書評を書いて下さった評者に感謝したい。評者は『コモンズとしての都市祭礼—長浜曳山祭の都市社会学—』（新曜社、2019年）を著され、第5回日本生活学会博士論文賞と第13回地域社会学会賞（個人著書部門）を受賞された。評者が筆者に与えた影響は大きく、実際、本書『栗東市の左義長からみる地域社会』（サンライズ出版、2019年）は、評者が編まれた『世代をつなぐ竜王の祭り—苗村神社三十三年式年大祭—』（サンライズ出版、2016年）を参考に構成したものである。

拙著刊行から1年が経った今も、読み返す度に書名の後半につけた「からみる地域社会」についての葛藤が甦る。「地域社会論からみる栗東市の左義長」とするのが一般的な書名の付け方だと思うのだが、筆者が論じたかったのはあくまで地域社会であり左義長ではないということを示した。そこには「左義長から」に限らず様々な観点があるということ、そして、いろいろなことからは丹念な調査を経ればそうした観点になり得るのではないかという思いが込められている。同時に「栗東市の」に限らない地域社会を視野に入れた議論を展開できるのではないかという思いもあった。他方、この題に十分に合った内容になっていないとも思える。それはまさに、評者の「社会学的に分析したものというよりは、あくまで民俗行事としての左義長に関する研究に読めてしまう」との指摘の通りである。

評者は社会学の先達として、本書の素材群を社会学的な見地からどのように見ることができかのヒントを、書評を通じて筆者に示してくれている。たとえば自治会が運営する以前に左義長の差配をしていた水入れや六人衆といった立場、街道筋集落の本家・分家関係などの意味は確かにより深い調査と考察が可能になりそうである。あるいはより重要な示唆として、柴・藁・藤・竹などの日常生活で用いられる資源をめぐる資源動員論あるいはコモンズ論的観点からのアプローチも同様に重要な指摘である。

筆者が執筆にあたってこれらの視点を取り入れた議論を展開できず、今なお、自身が付けた書名への葛藤を感じるのはなぜか。一つには、端的に筆者の力量不足に拠るものである。もう一つは、本書執筆の際に学術書ではなく一般書という扱いにしたことに、自身が引っ張られたことである。「です・ます」体での記述や、参考文献一覧や注釈は別記せず本文に入れ込んだことなどはそのためである。だが、記法は一般向けにしつつ、同時に理論を踏まえた考察をする挑戦をすべきだったかもしれない。

以上に加え、従来の理論や観点がどの程度、自身の研究に活用可能かが執筆段階では測れなかった。たとえば水入れや六人衆が登場するのは、まさにコモンズとしての惣堂や共同苗

代があったためである。だが、それらは本書が参考に用いた昭和末期の民俗調査時点において既に失われており、当該調査の対象となった当時の長老たちの若かりし頃の話だろう。現在、当地で左義長を差配するのは基本的には自治会である。commonsとしての左義長場の喪失と宅地開発による共有地から私有地への変化もまた本書が描いてきたことであった。そして、藁・竹などの資源は現在では日常生活から遠ざかった。その距離が近かったころには農家にとって希少財ではない藁・竹の提供は困難ではなかったし、非農家は現金を篤志金と呼んで代わりに提供していた。つまり、資源占有者がいたり、多くの資源を提供することで影響力を発揮できるような場があったりしたわけではない。

本書の射程は昭和後半から現在までにあったが、評者の指摘はそれ以前の社会をも含む射程をもっている。とりわけ歴史社会的な観点から、射程を長く取った社会分析は重要であり、筆者も取り組みたい。だがそのためには、社会の続き方が重要になる。つまり自治会のようなある種の制度的住民自治が生まれる以前と以後は、その社会の地域性や共同性が連続と続いてきたといえるのか、あるいは何かしらの断絶があったのかを明らかにしなければならない。本書執筆時点では短い射程に留まってもなお一定の説明が可能であると考えていたが、地域社会の連続性あるいは断絶性が確認できれば、評者の指摘に取り組むことができそうである。

そうした観点から筆者は現在、(1)伊勢講研究、(2)家屋史研究、(3)納税組合研究に取り組んでいる。個別に詳述することはできないが、いずれも「〇〇からみる地域社会」の「〇〇」にあたる部分をいろいろと探っているところであり、これらの研究のすべてに評者からの指摘を活かし、より広い射程を設定したい。

最後に、栗東歴史民俗博物館が主催した本書刊行記念シンポジウムに評者が来場して下さったことに改めてお礼申し上げたい。また、「メディアとしての本書の意義」として本書の制作過程に言及して下さったことも筆者にとって望外の喜びであった。評者の評とこの著者リプライもまた、地域住民と共に読みたいと思う。

(かさい よしり 慶應義塾大学法学部政治学科)